

(3) 初めての女友だち

病室に泊まり込むようになると、看護婦室で勤務する看護婦たちの顔を覚えるようになった。そのうちのひとりの看護婦は、加藤に夜食をつくってくれ、自分では食わずに、加藤は全部を平らげた。その事実を書いた加藤には、みずからを責める気持ちがあったのだろう。

看護婦室は一見雑然としていた。しかし、加藤はその雑然さのなかに整理されつくした複雑な秩序を発見する。一見雑然としたなかに複雑な秩序を発見させたものは何か。それは相手に対する関心の深さに違いない。加藤はこの看護婦に強い関心と愛情を感じていた。こうして彼女の出身地の内房を一緒に訪れるのであった。

1945（昭和20）年3月9日深夜から10日未明にかけて、東京は大空襲に遭う。東京大学病院も被災する。『ある晴れた日に』によれば、加藤らは防空壕に逃れる。そこには心を寄せていた看護婦もいた。彼女は、まだやれることがあるかもしれないといって病棟に戻ることを主張した。彼女に対して、行っても無駄だからここにいるようにと強くいう。彼女は「先生は……」といい残して飛び出していった。それが彼女を近くに見た最後で、彼女は二度と加藤の部屋には現れなかった。おそらくこれに近い事実が実際にあったのだろう。この日、加藤の淡い恋は終わった。